

拘縮予防の取り組みのなかで見られた 職員の意識の変化

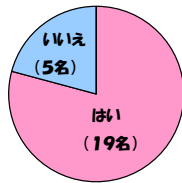


方法

- 研究期間 平成24年 6月～10月
- 職員へアンケートの実施
- 6月...分からないことの把握
- 7月...勉強会を実施し周知・情報の共有
- 8月・10月...勉強内容の効果測定
- 月1回の機能訓練に同席しリハビリ方法の指導を受ける

アンケート(6月)

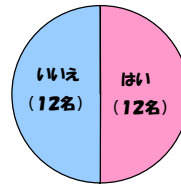
関節の曲げ伸ばし運動



- リハビリのやり方を知らない
- 折れてしまいそうで怖い
- 意識して行っていない

アンケート(6月)

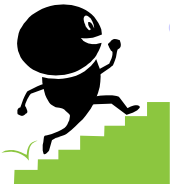
正しいクッションのかけ方



- 覚えきれていない
- かけ方が正しいか不安
- どこにかえば良いか分からない
- 記憶が薄れてしまう

目指すところ

- リハビリの基本を学ぶ
- 意識統一を図る
- 不安・怖さの軽減



生活で必要な関節へのアプローチをする方が重要で、屈伸することはご利用者にとって少なからず苦痛がある。
(理学療法士)

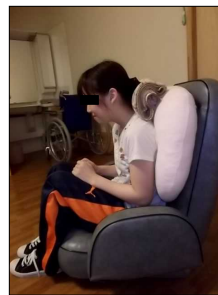
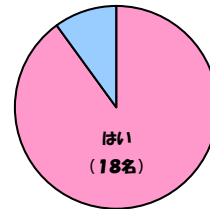


基本的な考え方

- 最大でも肘・膝関節を90度まで伸ばせば安楽に更衣・排泄が出来る
- 日常生活で必要な関節に重点的に関わること
- 声かけや表情を見ながら行う
- 指から徐々に、ゆっくり時間をかけて広げる
- 支持基底面積を広くするとリラックス出来る

アンケート(8月)

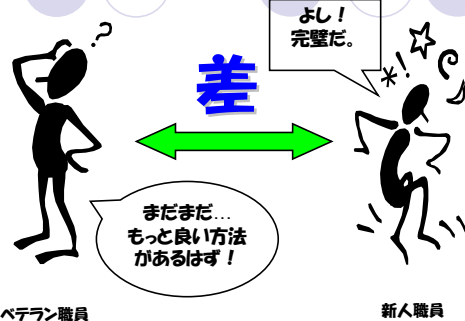
リハビリ・クッションについて理解出来たか

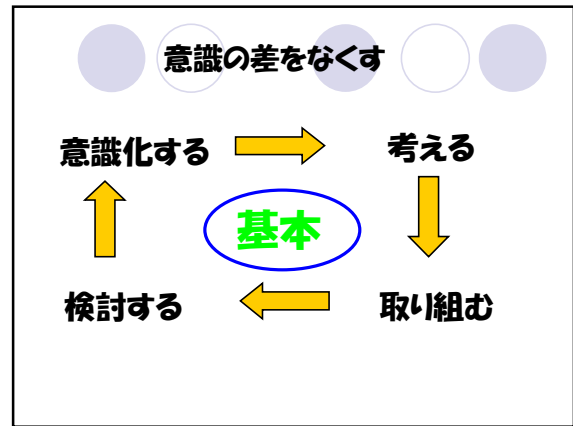
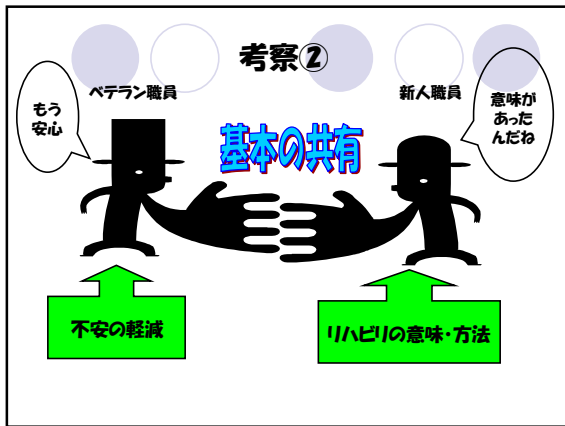


結果

- 基本事項の確認、意識統一が出来た。
- 詳しく説明して欲しい、注意やポイントを教えて欲しいという積極的な意見が出た。
- 自信がついた職員は増加したが、不安が残っている。
- 担当を中心とした話し合いと試行錯誤がケアプランに反映されるようになった。
- 居室にファイルを置くことで職員が気にして見るようになった。しかし、時間とともにバラつきが見られるようになってしまった。

考察①





結論・今後の課題

- リハビリの基本的な考え・方法を学習したことで意識統一が出来た
- 職員一人一人が自信をもって主体的に取り組んでもらう為に、専門職との連携と基本の振り返りが課題

